

学籍番号：204013 名 前：國重美紀 Kunishige Miki

研究室：藪内研究室

令和5年度 長岡造形大学 美術・工芸学科 クラフトデザインコース 卒業研究Ⅰ

研究テーマ 「風景の中にある心の解放感の金属表現研究」

○研究概要

この研究は、心と風景について考えを深めながら、鍛金技法の新たな表現を探究したものである。制作は、金属の表情や鍛金技法の特徴を探りながら試行錯誤し、最終的に金属板の上にイメージする風景の形と、金属の表情を活かした表現にたどり着いた。金属の形や面から感じるもの、それが風景を見た時の感覚と繋がるような作品を目指した。

○作品について



本作品は3つの作品から構成されている。作品に共通するのは、平面にぽつんと現れる立体の形である。鍛金で何かを作ろうとすると、銅板の板を切り、それをさらに丸く切り出す作業がある。その円板の上に、何かを想像したとき、板の上に広がっていく空間をイメージした。

家、海、草原の3つの風景が広がりを見せるように、平面の広がりを意識しながら制作した。

また、それぞれの作品の表面は、鋸目を残したものもあれば鏡面になるまで磨いたものもある。それらの違いは、制作していく中での試行錯誤から生まれたものである。風景を見ることについての考察、金属の表現の探求を経て、それぞれ表情の違った作品となった。

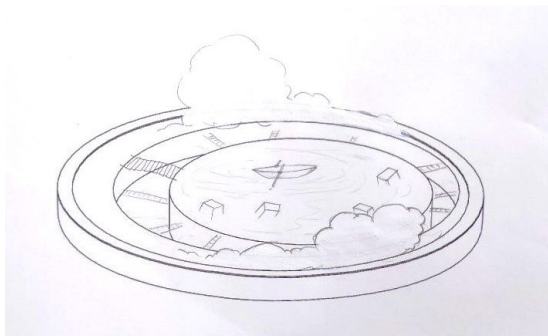
風景の広がり、輝き、揺らぎなどが、この作品からも感じられるようにしたい。

○中間発表からの変化

1. 想像の世界から現実の世界へ

前期の初めに考えたのは、南の島、夏、のような明るい気持ちになれる場所や環境によって風景を見た時の心が明るくなるような感覚を得られるのではないかということだった。

そこで、実際に行った島の写真、夏の写真を振り返ってみたが、私が体験した時の記憶は、視覚的な美しさだけではなく、そのとき体験した身体的な記憶もあった。日差しの温かさや街の音、地面を踏む感触、それらをどうにか形にしたい。中間発表では、この曖昧な感覚を「自身がイメージする世界を体験する装置」として自転車をモチーフに制作しようとした。そうすることで、鑑賞者が想像の世界で道を進んでいるような感覚を得られる作品を目指そうとしていた。



(中間発表で示したスケッチ)

しかし、中間発表で示したのは、曖昧なイメージから想起したもので、どこかで見た景色の寄せ集めは、夢の世界のようだった。

私が表現したかったのは想像上の風景ではなく、実際の風景と心が関係しあい、目の前に映し出される感情や感覚のような何かだった。そこで、実際の風景を見ながら、そして思い出しながら、そこに共通する心にふれる何かを探ることにした。

2. 心に触れる何か

実際の風景から感じ取れるものは、光、影、温度、音、色、香り……など基本的には五感から感じ取れるものだった。そして、風景の認識は五感だけではなく、五感から感じたものを総合的に認識する、感情を含めた何かもあると思う。それが、心に触れるものだろう。それを言語化してみると、

「前に進む感覚」「楽しい」「広大さ」「遠さ」「解放」「浮かぶ感じ」「優しい感じ」「穏やかさ」「自分の小ささと世界の広さ」「生きている感じ」「自由」「流れるような」「無数の光」「いつもとは違う眺め」「ここにある感覚」……などが思い浮かんだ。

この風景から感じた要素を作品に取り入れれば、実際の風景を見た時の感覚に繋がる作品となるのではないかと思う。そこで、これらの中でも特に、「前に進む感覚」「楽しい」「広大さ」「優しい感じ」を作品に取り入れ3つの作品にすることにした。

3. 風景と共感する

作品が形になっていくにつれて、その形が見る人にどのような感覚をもたせるのだろうか

と考えた。回転する作品や足で立っている作品、揺らぎのある作品。それらを見るとき、どんなことを感じるのか。それについて考え、調べる中で、「運動共感」という概念があることを知った。

「運動共感とは、ある動きを観測した人が、観測した動きを疑似的に感じるという知覚現象を指す。※」

この考え方を知ると、今回制作した回転する作品は、鑑賞者に回転する感覚をもたらすのではないかと思う。また、静止している形についても、平面を足で立たせた作品は少し浮くような感覚、平面が広がった作品は広がりを感じるのではないかと思う。また、作品の表面の金属光沢は、その表面が輝くことで、心の中の輝きとしても見えてくるのではないかと思う。

さらに、実際の風景についても、目の前の景色が開けた時に感じる解放感、風によって揺らぐものを見た時の楽しさの感覚、星が輝いている時に感じる心の中の輝きのようなものなど、さまざまところで風景と共感しながら眺めているのではないかと思った。

この作品でも、風景の様々な要素を取り入れたことで、そのような感覚が得られる作品にしたい。

○制作過程

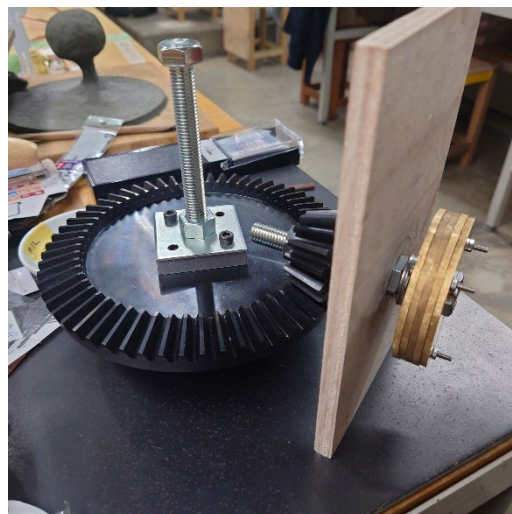
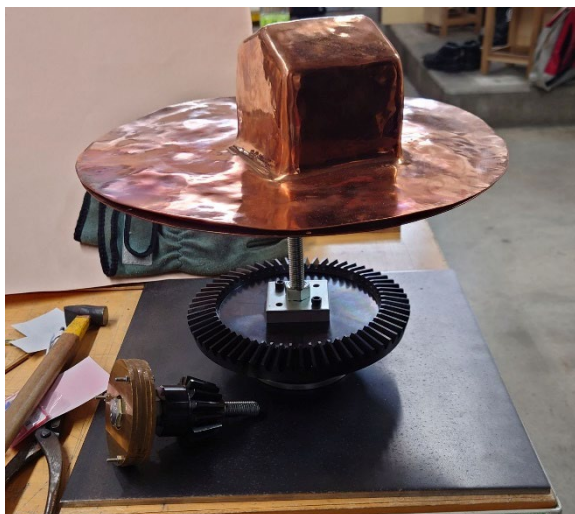
1.1 街の空間の作品



1つ目の作品は、街の空間をイメージして家のような立体を制作した。途中まで回転体を作る要領で絞り、角を出していった。そして、家の立体の縁を広げ、溶接した。立体の表面は、ピカールで磨いたまま数日置いていると、飴色に酸化していた。私はこの金属の表情が、夕焼けのようにも感じた。この色を取り入れるため、バーナーで少し炙り薄く酸化した面にさせた。



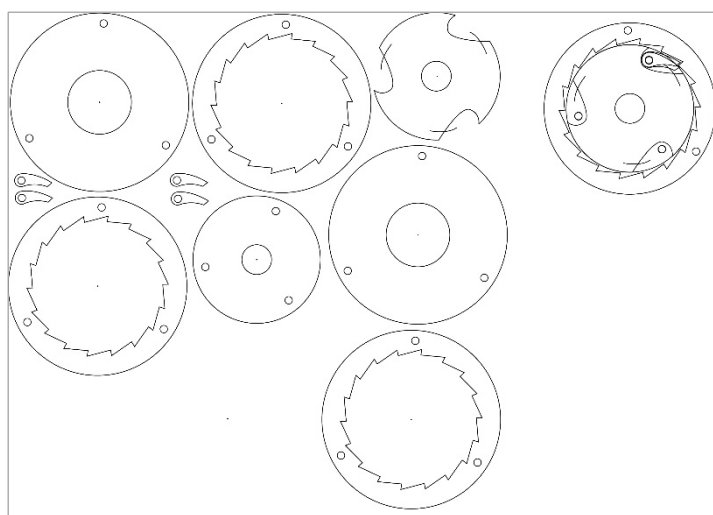
1.2 歯車機構とラチェット



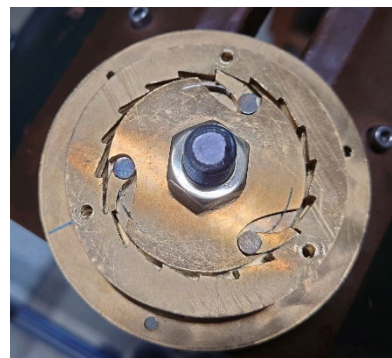
また、この作品は「前に進む」「自転車の音」という風景を見た時の要素を取り入れるため、自転車を参考にした機構と組み合わせた。

この機構は、展示台がギアボックスとして機能するようにしている。傘歯車を隠すことで、機構が作品の全体のイメージに影響しないようにしたいと考えた為である。また、この傘歯車の回転は、ハンドルを4回転させると上の立体が1回転している。

ハンドル部分はラチェット機構になっており、自転車の特徴的な音が出るようにした。



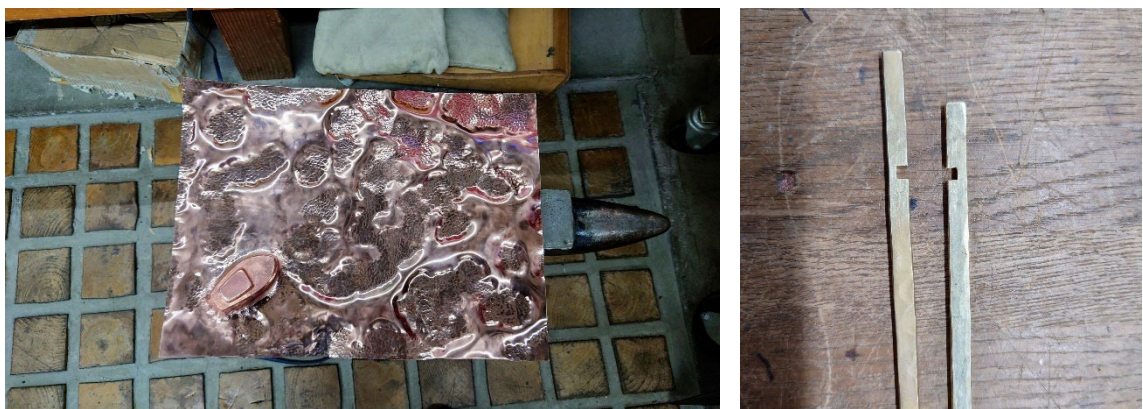
自転車のラチェットを参考に図面を作成し、板厚3mmの真鍮版から切り出していた。



2. 海の空間の作品



2つ目の作品は、海の空間をイメージして船のような立体を制作した。途中までは金槌や木槌で大まかな形を作り、その後、ヤニ台につけて打ち出した。

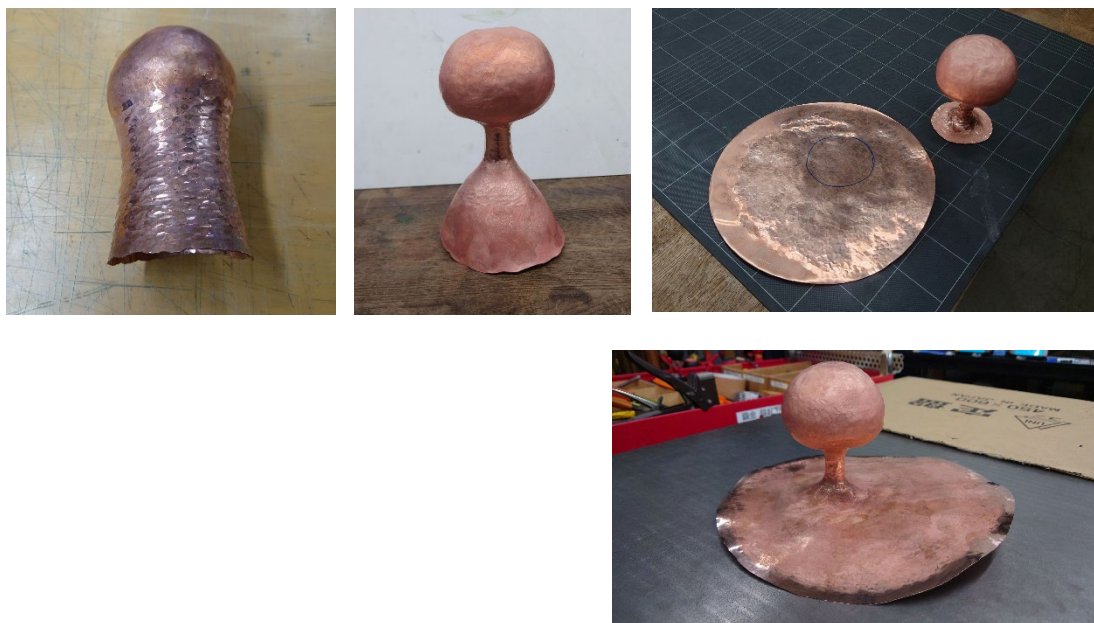


広く平らな面は、一定の範囲ごとにランダムに叩いていくことで、波の揺らぎを表現した。表面はバフやピカールで鏡面に仕上げ、光の反射によって海の波が煌めく様子を目指した。また、この作品は「浮くこと」という風景から感じる要素を取り入れるため、本体を支える柱を取り付けた。柱は、真鍮棒にコの字型の切り込みを入れて組み合わせ、ロウ付けした。

3. 草原の空間の作品

3つ目の作品は、草原の空間をイメージして、木のような立体を制作した。木の幹の部分は、直径 13.6mm まで絞り、縁を広げ、丸く切った銅板と溶接した。

この作品は、風景の「広がり」や「優しい感じ」の要素を取り入れるため、平面は少し揺らぎ、木は丸い形にして荒しで仕上げた。その後、荒した面の上を磨き棒で磨いた。そうすることで、草原や地面が細かく輝く様子が感じられることを目指した。



○まとめ、感想

今回の研究では、風景と心に対する思考を深め、それをどのようにして金属の特徴を生かした作品にするのかを目指した。しかし、目指すところへの道は一筋縄ではいかず、何度も転んで立ち上がってを繰り返してきた。時間が経つにつれ、自分が風景を見た時に何を感じているのか、それをどう表現するのかという考えが変化していき、最終的な作品の形も変化していった。今回見つけることができたのは、金属の面の揺らぎとそこに立つ立体によって空間のような場面を作ることができたことと、金属の光沢を活かした、風景を想起させる表現にたどり着けたことである。今後も、風景について、心について、金属の表現について、考えていきたいと思う。

ひとまずはこの時点での考えとしてまとめ、試行錯誤したこの1年の成果としたい。

引用：※

三好賢聖,『動きそのもののデザイン リサーチ・スルー・デザインによる運動共感の探求』
BNN,2022年,4頁